新版（しんぱん）　指導要文集（しどうようもんしゅう）

第一章（だいいっしょう）　信心の基本（しんじんのきほん）

御本仏（ごほんぶつ）の境界（きょうがい）・確信（かくしん）

日本国(にほんこく)にこれを知(しる)る者(もの)、ただ日蓮一人(にちれんいちにん)なり。

005 開目抄(かいもくしょう)（上(じょう)・下）

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)70ページー4行

「数々見擯出（しばしば擯出せられん）」等云々。日蓮、法華経のゆえに度々ながされずば、「数々」の二字いかんがせん。この二字は天台・伝教もいまだよみ給わず。いわんや余人をや。末法の始めのしるし「恐怖悪世の中」の金言のあうゆえに、ただ日蓮一人これをよめり。

（005 開目抄（上・下）

御本仏の境涯・確信73ページ－8行）

経文(きょうもん)に我(わ)が身符合(みふごう)せり。御勘気(ごかんき)をかぼれば、いよいよ悦(よろこ)び増をますべし。

（005開目抄(かいもくしょう)（上(じょう)・下）

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)74ページ－2行）

万難(ばんなん)をすてて道心(どうしん)あらん者(もの)にしるしとどめ留(とど)めてみせん。記(しる)

（005開目抄(かいもくしょう)（上(じょう)・下(げ)）

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)94ページ-16行）

当世日本国に第一に富める者は日蓮なるべし。命は法華経にたてまつり、名をば後代に留むべし。

（005開目抄（上・下）御本仏の境涯・確信101ページ-7行）

今の時代、日本の国でもっとも富めるものは日蓮です。命は法華経に捧げ、名を未来に残していくのです。

日蓮(にちれん)といいし者(もの)は、去年(こぞのとしく)九月十二日子丑時(がつじゅうににちねうしのとき)に頸(くび)はねられぬ。これは魂魄(こんぱく)、佐土国(さどのくに)にいたりて、返(かえ)る年(とし)の二月(にがつ)、雪中(せっちゅう)にしるして有縁(うえん)の弟子(でし)へおくれば、おそろしくておそろしからず。みん人(ひと)いかにおじ怖(おじ)ぬらん。送(おくれば)

005 開目抄(かいもくしょう)（上(じょう)・下(げ)）

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)102ページ-8行

日蓮(にちれん)というものは去年(きょねん)（文永八年(ぶんえいはちねん)）の九月十二日子丑の時(がつじゅうににちねうしとき)（夜半(やはん)）にくびをはねられました。（すなわち凡夫(ぼんぷ)の肉身(にくしん)は竜(たつ)の口(くち)において断(た)ち切(き)られ、久遠元初(くおんがんじょ)の自受用報身如来(じじゅゆうほうしんにょらい)とあらわれたので

す)。そして佐渡の国へ流罪されて、翌年の二月、雪深い季節にこの書(「開目抄」)を認めて、縁のある弟子へ送るのです。この書を拝する人は、末法に正法を弘めゆくときにかならず起こる大難を一往恐れるでしょうが、妙法弘通の決意がかたければ何を恐れることがありましょうか。しかし、その決心のない人はどれほど恐れることでしょうか。

詮ずるところは、天もすて給え、諸難にもあえ、身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の婆羅門の責めを堪えざるゆえ。久遠・大通の者の三・五の塵をふる、悪知識に値うゆえなり。善に付け悪につけ、法華経をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てん。日本国の位をゆずらん、法華経をすてて観経等について後生をごせよ、父母の頸を刎ねん、念仏申さずばなんどの種々の大難出来すとも、智者に我が義やぶられずば用いじとなり。その外の大難、風の前の塵なるべし。我日本の

柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん等とちかいし願いやぶるべからず。

（005 開目抄（上・下）御本仏の境涯・確信114ページ－1行）

（諸天善神の加護があるかないかを論じてきたが）つまるところ諸天善神も日蓮を見捨てるならば見捨てなさい。たとえどのような難にあったとしても、身命をなげうって正法弘通に邁進するのみです。舎利弗が六十劫という長い間菩薩行を積みながら、途中で退転したのは、婆羅門が舎利弗の目を欲しいと責められたのに耐え

られなかったためです。また久遠五百塵点劫および三千塵点劫の昔に法華経の下種を受けた者が三千塵点劫や五百塵点劫の間悪道（苦しみの状態）におちていたのも、修行中に悪知識（仏道修行を妨げる者のこと）にあって退転したからです。善きにつけ悪いことにつけ法華経を捨てることは地獄に堕ちる行為です。今こそ一生成仏、正法流布の大願を立てましょう。法華経を捨てて観経等の念仏の信仰に入り後生の極楽浄土を願うならば日本国の位をゆずろう、との誘惑があっても、また念仏を唱えなければ父母の首をはねるとの脅迫があっても、その他のいろいろな

大難がおこってきても、知者に日蓮の立てる法門が破られないかぎりは絶対に他の教えにはしたがうことはありません。それ以外の大難は風の前の塵のようなものです。私は日本の柱となりましょう（主の徳）私は日本の眼目となりましょう（師の徳）私は日本の大船となりましょう（親の徳）等と、主師親の三徳をもって末法のあらゆる人びとを救おうとの誓いは絶対に破ることがないのです。

日蓮は日本国の諸人にしゅうし父母なり。

（005開目抄（上・下）御本仏の境涯・確信121ページー6行）

日蓮は日本のすべての人にとって主であり、師であり、親であるのです。

法華経をひろむる者は、日本の一切衆生の父母なり。
章安大師云わく「彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が親なり」等云々。されば、日蓮は、当帝の父母、念仏者・禅衆・真言師等が師範なり、また主君なり。

（009撰時抄
御本仏の境涯・確信173ページ-15行）

漢土（かんど）・日本（にほん）に智慧（ちえ）すぐれ才能（さいのう）いみじき聖人（しょうにん）は度々（たびたび）ありし
かども、いまだ日蓮（にちれん）ほど法華経（ほけきょう）のかとう方（かた）どして国土（こくど）に強敵（ごうてき）
多（おお）くもうけたる者（もの）なきなり。まず眼前（がんぜん）の事（こと）をもって日蓮（にちれん）は
閻浮第一（えんぶだいいち）の者（もの）として知（しる）べし。

（009撰時抄（せんじしょう）

御本仏（ごほんぶつ）の境涯（きょうがい）・確信（かくしん）199ページ－3行）

権大乗経の題目の広宣流布するは、実大乗経の題目の流布せんずる序にあらずや。心あらん人は、これをすいしぬべし。権経流布せば実経流布すべし。権経の題目流布せば、実経の題目また流布すべし。欽明より当帝にいたるまで七百余年、いまだきかず、いまだ見ず、南無妙法蓮華経と唱えよと他人をすすめ、我と唱えたる智人なし。日出でぬれば星かくる。賢王来れば愚王ほろぶ。実経流布せば権経のとどまり、智人南無妙法蓮華経と唱えば愚人のこれに随わんこと、影と身と、声と響き

とのごとくならん。

日蓮は日本第一の法華経の行者なること、あえて疑いなし。これをもってすいせよ。漢土・月支にも一閻浮提の内にも、肩をならぶる者は有るべからず。

（009撰時抄

御本仏の境涯・確信199ページ-10行）

外典に云わく「未萌をしるを聖人という」。内典に云わく「三世を知るを聖人という」。

余に三度のこうみようあり。

（009撰時抄

御本仏の境涯・確信204ページ－5行）

外典（仏教典以外の書）には「将来に起こるべきことを知る人を聖人いう」とあります。仏教の教えでは「過去、現在、未来の三世を知っている人を聖人という」とあります。日蓮には三度の大功績（三度の予言がすべて的中したこと）があります。

されば、現(げん)に勝(すぐ)れたるを勝(すぐ)れたりということは、慢(似)にして大功徳(だいくどく)となりけるか。

（009撰時抄(せんじしょう)

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)207ページ-11行）

当世日本国の智人等は衆の星のごとし、日蓮は満月のごとし。

（009撰時抄

御本仏の境涯・確信208ページ-16行）

南無阿弥陀仏の用も、南無大日真言の用も、観世音菩薩の用も、一切の諸仏・諸経・諸菩薩の用、皆ことごとく妙法蓮華経の用に失わる。彼の経々は妙法蓮華経の用を借らずば、皆いたずらのものなるべし。当時眼前のことわりなり。日蓮が南無妙法蓮華経と弘むれば、南無阿弥陀仏の用は月のかくるがごとく、塩のひるがごとく、秋冬の草のかるるがごとく、氷の日天にとくるがごとくなりゆくをみよ。

（010 報恩抄

御本仏（ごほんぶつ）の境涯（きょうがい）・確信（かくしん）
（257ページ－11行）

天台大師云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」等云々。広宣流布の時を指すか。伝教大師云わく「正像や過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り」等云々。末法の始めを願楽するの言なり。時代をもって果報を論ずれば、竜樹・天親に超過し、天台・伝教にも勝るるなり。

（037顕仏未来記

御本仏の境涯・確信606ページ-14行）

我が言は大慢に似たれども、仏記を扶け如来の実語を顕さんがためなり。しかりといえども、日本国中に日蓮を除き去っては誰人を取り出だして法華経の行者となさん。汝、日蓮を謗らんとして仏記を虚妄にす。あに大悪人にあらずや。

（037顕仏未来記

御本仏の境涯・確信609ページ-14行）

およそ妙法の五字は末法流布の大白法なり、地涌千界の大士の付嘱なり。この故に、南岳・天台・伝教等は内に鑑みて、末法の導師にこれを譲って弘通し給わざりしなり。

（038当体義抄
御本仏の境涯・確信627ページ-7行）

たとい日蓮(にちれん)、富楼那(ふるな)の弁(べん)を得(え)て、目連(もくれん)の通(つう)を現(げん)ずとも、勘(かん)うるところ当(あ)たらずんば、誰(たれ)かこれを信(しん)ぜん。

（041　顕立正意抄(けんりっしょういしょう)

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)639ページ-13行）

されば、無作の三身とは、末法の法華経の行者なり。
無作の三身の宝号を、「南無妙法蓮華経」と云うなり。

（095 御義口伝
御本仏の境涯・確信 1048ページ－11行）

今(いま)、日蓮等(にちれんとう)の類(たぐ)い、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(とな)え奉(たてまつ)るは、大良薬(だいりょうやく)の本主(ほんしゅ)なり。

（095御義口伝

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)1053ページー4行）

末法の「仏」とは、凡夫なり、凡夫僧なり。「法」とは、題目なり。「僧」とは、我ら行者なり。仏とも云われ、また凡夫僧とも云わるるなり。

（095 御義口伝

御本仏の境涯・確信

1067ページ－8行）

仏になる道は、必ず身命をすつるほどの事ありてこそ、仏にはなり候らめとおしはからる。既に経文のごとく「悪口・罵詈」「刀杖・瓦礫」「しばしば擯出せられん」と説かれて、かかるめに値い候こそ法華経をよむにて候らめと、いよいよ信心もおこり、後生もたのもしく候。死して候わば、必ず各々をもたすけたてまつるべし。

（098 佐渡御勘気抄
御本仏の境涯・確信 1195ページ-11行）

仏になる道にはかならず命を捨てるほどのことがあってはじめて仏になれると思われます。すでに経文に説かれている悪口罵詈（悪口をいわれ、ののしられること）、刀杖瓦礫（刀、杖、瓦、小石による難）、数数見擯出（しばしば住む所を追われること＝二度の流罪）等の難にあってきたことは、まさに法華経を身読したことになると、ますます信心もおこり、後生もたのもしく思われます。死んでいったとしても、かならず一人一人の弟子、檀那を助けてさしあげましょう。

日蓮をだに用いぬほどならば、将門・純友・貞任・利仁・田村のようなる将軍、百千万人ありとも叶うべからず。

（102 清澄寺大衆中

御本仏の境涯・確信1208ページー3行）

わずかの小島のぬしらがおどさんをおじては、閻魔王のせめをばいかんがすべき。仏の御使いとなのりながらおくせんは、無下の人々なり

（107種々御振舞御書

御本仏の境涯・確信1227ページ―13行）

わずかばかりの小島である日本の国の主（執権）等がおどすのを恐れているようでは、退転して地獄に堕ちたときに閻魔王に責められたならばいったいどうするのですか。仏の御使いと名乗っておきながら、今さら臆病になったとしたら、それはもっともいやしい人

びとです。

今、日蓮は日本第一の法華経の行者なり。その上、身に一分のあやまちなし。日本国の一切衆生の法華経を謗じて無間大城におつべきをたすけんがために申す法門なり。

（107 種々御振舞御書
御本仏の境涯・確信 1230ページ－10行）

「今夜、頸切られへまかるなり。この数年が間願いつることこれなり。この娑婆世界にして、きじとなりし時は鷹掴たかにつかまれ、ねずみとなりし時はねこにくらわれき。妻子あるいはめこのかたきに身を失いしこと、大地微塵より多し。法華経の御ためには一度だも失うことなし。されば、日蓮、貧道の身と生まれて、父母の孝養、心にたらず。国の恩を報ずべき力なし。今度、頸を法華経に奉って、その功徳を父母に回向せん。そのあまりは弟子檀那等にはぶくべしと申せしこと、これなり」

（107 種々御振舞御書

御本仏の境涯・確信

1231ページ－7行）

今夜首を斬られに行くのです。この数年の間願ってきたことはこのことです。この娑婆世界において雉となったときは鷹につかまれ、ねずみとなったときは猫に食われてきました。あるいは妻子の敵のために命を失ったことは大地の塵の数よりも多いのです。ところが、法華経のためにはただの一度も命をなくしたことはありませんでした。そのために日蓮は貧しい僧侶の身と生まれて、父母への孝養も思うようにできず、国の恩を報ずる力もありません。今度

こそ首(くび)を法華経(ほけきょう)にさしあげて、その功徳(くどく)を父母(ふぼ)に回向(えこう)しましょう。そのあまりは弟子(でし)、檀那(だんな)に分(わ)け与(あた)えましょうといってきたのはこのことです。

日蓮申すよう「不かくのとのばらかな。これほどの悦び
をばわらえかし。

（107種々御振舞御書
御本仏の境涯・確信1231ページ－14行）

（竜の口法難の大聖人の処刑のさい、思わず涙を流した
四条金吾に対して）日蓮（大聖人）が「不覚な殿方ではない
か、これほどの喜びはないのだから笑いなさい」といいました。

今、日蓮は、末法に生まれて妙法蓮華経の五字を弘めてかかるせめにあえり。仏滅度して後二千二百余年が間、恐らくは天台智者大師も「一切世間に怨多くして信じ難し」の経文をば行じ給わず。「しばしば擯出せられん」の明文は、ただ日蓮一人なり。「一句一偈、我は皆ために授記す」は我なり。阿耨多羅三藐三菩提は疑いなし。

（107種々御振舞御書

御本仏の境涯・確信1235ページ－4行）

日蓮によりて日本国の有無はあるべし。譬えば、宅に柱なければたもたず、人に魂なければ死人なり。日蓮は日本の人の魂なり。

（107種々御振舞御書
御本仏の境涯・確信1238ページ-15行）

日蓮によって日本国の有無（存亡）は決まるのです。たとえば家に柱がなければ保たず。人に魂がなければ死人であるのと同じ道理です。日蓮は日本の人の魂なのです。

日蓮は幼若の者なれども、法華経を弘むれば釈迦仏の御使いぞかし。わずかの天照太神・正八幡なんどと申すは、この国には重けれども、梵釈・日月・四天に対すれば小神ぞかし。

（107種々御振舞御書

御本仏の境涯・確信1239ページ－9行）

悪王の正法を破るに、邪法の僧等が方人をなして智者を失わん時は、師子王のごとくなる心をもてる者、必ず仏になるべし。例せば日蓮がごとし。

（122佐渡御書

御本仏の境涯・確信1286ページ－1行）

悪い権力者が正しい仏法を破ろうとするのに、あやまった宗教の僧たちがその味方をして、智者をなきものにしようとするときに、師子王のように勇気ある信心をもつ人は、かならず成仏することができます。たとえば日蓮のようなものです。

日蓮は、この関東の御一門の棟梁なり、日月なり、亀鏡なり、眼目なり。日蓮捨て去る時、七難必ず起こるべし

（122佐渡御書

御本仏の境涯・確信1286ページー14行）

日蓮は、この関東の御一門（鎌倉北条幕府）の棟梁（指導者）であり、日月であり、鏡であり、眼目（将来をあやまりなく見定める中心となる人）であります。その日蓮を用いず流罪して捨て去ってしまうときには、七種類の難がかならず起こるでありましょう。

日蓮が臨終一分も疑いなし。頭を刎ねらるるの時は殊に喜悦有るべく候。大賊に値って大毒を宝珠に易うと思うべきか。

（123 富木殿御返事（諸天加護なき所以の事）
御本仏の境涯・確信 1293ページ-1行）

日蓮、またまたかくのごとし。竜樹・天親等すら、なおその類いにあらず等云々。これは誇耀にあらず。法相のしからしむるのみ。

故に、天台大師、日蓮を指して云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」等云々。伝教大師、当世を恋いて云わく「末法はなはだ近きに有り」等云々。

幸いなるかな、我が身「しばしば擯出せられん」の文に当たること。悦ばしいかな、悦ばしいかな。

（土木殿御返事（経文符合の事）

御本仏（ごほんぶつ）の境涯（きょうがい）・確信（かくしん）
1298ページ－17行）

聖人（しょうにん）と申（もう）すは、委細（いさい）に三世（さんぜ）を知（し）るを聖人（しょうにん）と云（い）う。

（133 聖人知三世事（しょうにんちさんぜじ））

御本仏（ごほんぶつ）の境涯（きょうがい）・確信（かくしん）1314ページ－6行）

聖人（しょうにん）というのは、くわしく過去（かこ）・現在（げんざい）・未来（みらい）の三世（さんぜ）を知（し）る人（ひと）を聖人（しょうにん）というのです。

日蓮（にちれん）は一閻浮提第一（いちえんぶだいだいいち）の聖人（しょうにん）なり。

（133 聖人知三世事（しょうにんちさんぜじ））

御本仏（ごほんぶつ）の境涯（きょうがい）・確信（かくしん）1315ページー4行）

我が弟子、仰いでこれを見よ。これひとえに、日蓮が尊貴なるにあらず、法華経の御力の殊勝なるによるなり。身を挙ぐれば慢ずと想い、身を下せば経を蔑る。松高ければ藤長く、源深ければ流れ遠し。幸いなるかな、楽しいかな。穢土において喜楽を受くるは、ただ日蓮一人なるのみ。

（133 聖人知三世事
御本仏の境涯・確信 1315ページー8行）

日蓮は、世間には日本第一の貧しき者なれども、仏法をもって論ずれば一閻浮提第一の富める者なり。これ、時のしからしむる故なりと思えば、喜び身にあまり、感涙押さえ難く、教主釈尊の御恩報じ奉り難し。

（141四菩薩造立抄

御本仏の境涯・確信1339ページー15行）

日蓮は世間的にみれば日本で一番貧しい者ですが、仏法のうえからみれば世界中でもっとも富める者なのです。このことはひとえに末法という時に生まれたがためであると思えば、喜びは体じゅう

にあふれ、歓喜(かんき)の涙(なみだ)は押(おさ)えがたく、どのようにして教主釈尊(きょうしゅしゃくそん)への御恩(ごおん)に報(むく)いていけばいいでしょうか。

今(いま)、日蓮(にちれん)、法華経(ほけきょう)一部(いちぶ)よみて候(そうろう)。一句(いっく)一偈(いちげ)になお受記(じゅき)をかぶ被(ひ)れり。いかにいわんや一部(いちぶ)をやと、いよいよたのも頼(らい)し。

（150 転重軽受法門(てんじゅうきょうじゅほうもん)

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)1357ページ-17行）

今この亀鏡をもって日本国を浮かべ見るに、必ず法華経の大行者有るか。既にこれを謗る者に大罰有り。これを信ずる者、何ぞ大福無からん。

（162 曽谷入道殿許御書

御本仏の境涯・確信

1410ページ－2行）

法華経の行者としてかかる大難にあい候は、くやしく思い候わず。いかほど生をうけ死にあい候とも、これほどの果報の生死は候わじ。また三悪四趣にこそ候いつらめ。今は生死切断し、仏果をうべき身となれば、よろこばしく候。

（194四条金吾殿御返事（煩悩即菩提の事）

御本仏の境涯・確信1520ページ-7行）

日蓮(にちれん)は少(おさ)きより今生(こんじょう)のいのりなし。祈ただ仏(ほとけ)にならんと成おもう思(おも)ばかりなり

（209四条金吾殿御返事(しじょうきんごどのごへんじ)（世雄御書(せおうごしょ)）

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)1590ページ－14行）

日蓮(にちれん)は若(わか)いときから、今世(こんぜ)のことを願(ねが)ったことはありません。ただ仏(ほとけ)になろうと思(おも)い願(ねが)うだけです。

仏の大難には及ぶか勝れたるか、それは知らず。

竜樹・天親・天台・伝教は余に肩を並べがたし。日蓮

末法に出でずば、仏は大妄語の人、多宝・十方の諸仏は

大虚妄の証明なり。仏の滅後二千二百三十余年が間、

一閻浮提の内に仏の御言を助けたる人、ただ日蓮一人な

り。

（219 聖人御難事

御本仏の境涯・確信 1619ページー5行）

（大聖人の受けてこられた難は）釈尊がうけた難と同じか、

あるいはもっと大きいか、それはしりませんが、竜樹菩薩、天台大師、伝教大師がうけた難は私（大聖人）と比べものになりません。日蓮が末法に生まれてこなければ、釈尊は大うそつきの人となり、それを真実だと証明した多宝如来や十方の諸仏は、大うそを正しいと証明したことになってしまいます。釈尊がなくなってから二千二百三十数年の間に、世界中で、仏の言ったことをそのとおりに実践して、仏の教えが正しいことを証明し、助けた人はただ日蓮一人だけです。

日蓮(にちれん)をば、日本国(にほんこく)の上一人(かみいちにん)より下万民(しもばんみん)に至(いた)るまで一人(ひとり)もなくあやまたんとせしかども、今(いま)までこうて候(そうろう)ことは、一人(ひとり)なれども心(こころ)のつよき故(ゆえ)なるべしとおぼす思(おも)べし。

（242乙御前御消息(おとごぜんごしょうそく)

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)1689ページ-17行）

日蓮(にちれん)は日本国(にほんこく)の人々(ひとびと)の父母(ふぼ)ぞかし、主君(しゅくん)ぞかし、明師(みょうし)ぞかし。これを背(そむ)かんことよ。

（271一谷入道御書(いちのさわのにゅうどうごしょ)

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)1764ページ－6行）

日蓮(にちれん)は日本国(にほんこく)には第一(だいいち)の忠(ちゅう)の者(もの)なり。肩(かた)をならぶる人(ひと)は先代(せんだい)にもあるべからず、後代(こうだい)にもあるべしとも覚(おぼ)えず。

（273 中興入道消息(なかおきのにゅうどうしょうそく)

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)1769ページ-16行）

こっしょ　このかた　ふぼ　しゅくんとう　ごかんき　こうむ　おんごく　しま
劫初より以来、父母・主君等の御勘気を蒙り、遠国の島
るざい　ひと　われ　よろこ　み　あま　もの
に流罪せらるるの人、我らがごとく悦び身に余りたる者
よもあらじ。

（278　さいれんぼうごへんじ
最蓮房御返事
ごほんぶつ　きょうがい　かくしん
御本仏の境涯・確信
1784ページ-1行）

されば、釈迦・多宝の二仏というも用の仏なり。妙法蓮華経こそ本仏にては御座しまし候え。経に云わく「如来の秘密・神通の力」、これなり。「如来の秘密」は体の三身にして本仏なり、「神通の力」は用の三身にして迹仏ぞかし。凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり。しかれば、釈迦仏は我ら衆生のためには主・師・親の三徳を備え給うと思いしに、さにては候わず、返って仏に三徳をかぶらせ奉るは凡夫なり。

（280 諸法実相抄（しょほうじっそうしょう）

御本仏（ごほんぶつ）の境涯（きょうがい）・確信（かくしん）

1789ページ－6行）

日蓮、末法に生まれて、上行菩薩の弘め給うべきところの妙法を先立ってほぼひろめ、つくりあらわし給うべき本門寿量品の古仏たる釈迦仏、迹門宝塔品の時涌出し給う多宝仏、涌出品の時出現し給う地涌の菩薩等をまず作り顕し奉ること、予が分斉にはいみじきことなり。日蓮をこそにくむとも、内証にはいかが及ばん。

（280 諸法実相抄

御本仏の境涯・確信 1790ページー3行）

かくのごとく思いつづけて候えば、流人なれども喜悦はかりなし。うれしきにもなみだ、つらきにもなみだなり。涙は善悪に通ずるものなり。彼の千人の阿羅漢、仏のことを思いいでて涙をながし、ながしながら文殊師利菩薩は妙法蓮華経と唱えさせ給えば、千人の阿羅漢の中の阿難尊者は、なきながら「如是我聞（かくのごときを我聞きき）」と答え給う。余の九百九十九人は、なくなみだを硯の水として、また「如是我聞」の上に「妙法蓮華経」とかきつけしなり。今、日蓮もかくの

ごとし。かかる身となるも、妙法蓮華経の五字七字を弘むる故なり。釈迦仏・多宝仏、未来日本国の一切衆生のためにとどめおき給うところの妙法蓮華経なりと、かくのごとく我も聞きし故ぞかし。

現在の大難を思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を思って喜ぶにもなみだせきあえず。鳥と虫とはなけどもなみだおちず。日蓮はなかねどもなみだひまなし。このなみだ世間のことにはあらず。ただひとえに法華経の故なり。もししからば甘露のなみだとも云いつべし。

（280 諸法実相抄

御本仏の境涯・確信 1792ページ 4行）

このように思い続けていると、流罪の身とはいえ限りなく喜ばしいことです。人はうれしいことにつけても、悲しいことにつけても涙を流します。涙というものは善悪のどちらにも通ずるものです。（中略）いま日蓮も、釈尊がなくなった後に弟子たちが釈尊をしのんで涙を流したのと同じく涙しています。このような流罪の身となったのも法華経の題目を弘めたためです。その妙法は釈尊、多宝如来が未来に日本の国のあらゆる人びとのために留

め残してくださったところの妙法蓮華経であると、私も経文どおりに聞いてきたからです。そして、法華経の教えのとおり修行してきた結果として、現在の大難にあっていることを思っても涙が流れ、未来の成仏を思っても喜びで涙がとめどなくあふれてきます。鳥と虫は鳴きますが、涙は流しません。日蓮は泣きませんが、涙のとどまることはありません。この涙は世間一般のことによるのではなく、ただひとえに法華経の行者として実践するために流す涙です。ですから、それは甘露（最高の味）の涙といえるでしょう。

既に法華経のために御勘気を蒙れば、幸いの中の幸いなり。瓦礫をもって金銀に易うとは、これなり。

（284 波木井三郎殿御返事

御本仏の境涯・確信 1811ページー8行）

そもそも、日蓮、種々の大難の中には竜の口の頸の座と東条の難にはすぎず。その故は、諸難の中には命をすつる程の大難はなきなり。あるいはのり、せめ、あるいは処をおわれ、無実を云いつけられ、あるいは面をうたれしなどは物のかずならず。されば、色心の二法よりおこりてそしられたる者は、日本国の中には日蓮一人なり。

（324上野殿御返事（刀杖難の事）御本仏の境涯・確信1888ページー6行）

およそ日蓮がうけたさまざまな大難のなかでも、竜の口の座と、

東条景信におそわれた小松原の法難以上の大難はありませんでした。そのわけは、多くの難のなかでも、ほかには命を捨てるような大難はなかったからです。悪口をいって責められ、あるいは住んでいるところを追い出され、無実の罪をいいつけられ、あるいは顔を打たれたことなどは、たいしたことではありません。したがって、色心の二法にわたって法華経を実践したために非難された者は、日本国のなかでは日蓮一人だけなのです。

勧持品に八十万億那由他の菩薩の異口同音の二十行の偈は、日蓮一人よめり。誰か出でて、日本国・唐土・天竺、三国にして、仏の滅後によみたる人やある。また我よみたりとなのるべき人なし。また、あるべしとも覚えず。

「および刀杖を加う」の「刀杖」の二字の中に、もし「杖」の字にあう人はあるべし。「刀」の字にあいたる人をきかず。不軽菩薩は「杖木・瓦石」と見えたれば、杖の字にあいぬ、刀の難はきかず。天台・妙楽・伝教等は「刀杖も加えず」と見えたれば、これまたかけたり。

日蓮は「刀杖」の二字ともにあいぬ。あまつさえ、刀の難は、前に申すがごとく、東条の松原と竜の口となり。一度もあう人なきなり。日蓮は二度あいぬ。杖の難には、すでにしょうぼうにつらをうたれしかども、第五の巻をもってうつ。うつ杖も第五の巻、うたるべしと云う経文も五の巻、不思議なる未来記の経文なり。

（324上野殿御返事（刀杖難の事）御本仏の境涯・確信1890ページ－11行）

日蓮(にちれん)、仏果(ぶっか)をえ得(ぶっか)んに、いかでかしようぼうが恩(おん)をすつべきや。いかにいわんや、法華経(ほけきょう)の御恩(ごおん)の杖(つえ)をや。かくのごとく思(おも)いつづけ候(そうら)えば、感涙(かんるい)おさえ押(おさえ)がたし。

（324 上野殿御返事（刀杖難の事）

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)

1891ページ-11行）

夫れ、大事の法門と申すは別に候わず。時に当たって、我がため国のため大事なることを少しも勘えたがえざるが、智者にては候なり。仏のいみじきと申すは、過去を勘え、未来をしり、三世を知ろしめすに過ぎて候御智慧はなし。

（353 蒙古使御書

御本仏の境涯・確信 1947ページ－2行）

日蓮は日本第一のふとうの法師。ただし、法華経を信じ候ことは、一閻浮提第一の聖人なり。その名は十方の浄土にきこえぬ。定めて天地もしりぬらん。日蓮が弟子となのらせ給わば、いかなる悪鬼等なりとも、よもしらぬよしは申さじとおぼすべし。

（361　妙心尼御前御返事（病之良薬の事）

御本仏の境涯・確信1964ページー4行）

ただ日蓮一人ばかり日本国に始めてこれを唱えまいらすること、去ぬる建長五年の夏のころより今に二十余年の間、昼夜朝暮に南無妙法蓮華経とこれを唱うることは一人なり。念仏申す人は千万なり。予は無縁の者なり。念仏の方人は有縁なり、高貴なり。しかれども、師子の声には一切の獣、声を失う。虎の影には犬恐る。日天東に出でぬれば、万星の光は跡形もなし。法華経のなき所にこそ弥陀念仏はいみじかりしかども、南無妙法蓮華経の声出来しては、師子と犬と、日輪と星との光くらべのご

とし。譬(たと)えば、鷹(たか)と雉(きじ)とのひとしからざるがごとし。等

（379 松野殿後家尼御前(まつのどののごけあまごぜんごへんじ)御返事

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん)2003ページ－6行）